

「青すすき虹のごと崩えし朝の魔羅」

俳人でもあった角川源義が、58歳で亡くなる2か月前に詠んだ句である。

金子兜太が「晩年の作の最高傑作」と評した句について、娘である辺見じゅんは「魔羅」は自らの男としての象徴です」として、こう述べている。

「この句は父の絶唱です。男として、人間としての絶唱とも思えるのです」（角川春樹『角川源義の自伝』）

辺見はノンフィクション作品で戦争をテーマにしてきた理由を「太平洋戦争は、私にとって父たちの世紀であった」からだと書いている（「神速る川面に咲いた真つ赤な花」）。

源義と同じ大正生まれの人々は、20代から30代で戦争を経験している。辺見は全国を歩き、戦争が青春だった世代の男たちの人生をたどった。そして、生き延びた者と死んでいった者、両方の声を作品の中に記録した。辺見が行ったのは、父の世代を歴史の中に位置づける仕事で

この父ありて

梯久美子

ある。それは父に限りなく近づくと同時に、父を相対化する（と）でもあった。

辺見はいくつかのエッセイの中で、源義が「火宅の人」だったことを書いているが、そこに父への批判や嫌悪は見取れない。それは「青すすき」の句を「男として、人間としての絶唱」と捉えるような目、源義を「私の父」としてだけではなく「心ざりの男」として見る目を、作家としての仕事の中で獲得したからだろう。

作家・歌人 辺見 じゅん ⑦



晩年の辺見じゅん

で、家に帰ってこない夫をひたすら待ち続ける妻だった。源義が亡くなったとき、辺見は母に、なぜ父と別れなかったのか尋ねた。母は「お父さんが好きだったからよ。だってお父さん、可愛いことがあるでしょ」と答えてくれた。そのとき、子供のためにはなく、その男が好きだから待つと答えた母を美しく、眩しく思った（「胸で小豆」）

源義が亡くなる直前の母の姿を辺見が描いたエッセイがある。母ではなく父のための女になった瞬間であった（「結婚して得たもの、失ったもの」）源義は妻の問いかけに「うん、うん」と頷いた。昏睡状態になる2日前のことだったという。この文章が書かれたのは、源義の死から15年後である。年齢を重ねた辺見は「こゝで、女としての母の生き方に思いを寄せている。母が愛した男として父を捉えることもまた、父を一人の人間として見る目を育てたに違いない。

辺見は2011年9月21日、東京都武蔵野市の自宅で脳内出血のため急逝した。72歳だった。歌人としての辺見は、父への挽歌を生涯詠み続けた。臨終の瞬間をつたへ、喉ぼとけごとりと落ちて逝きたまふ、唇サイレンの鳴りいづるかな（第1歌集『雪の座』収録）から始まる父愛の歌は、死の年の『短歌』8月号に掲載された次の一首で幕を閉じる。

肉親を相対化して捉える筆

そうした目を辺見にもたらしたものがもうひとつある。母・照子の存在である。

◎ ◎
辺見が書く文章に「母」とあれば、それは、辺見が小学校4

年のときに家を出た生母ではなく、父の後妻である照子のこと

だ。源義が亡くなったとき、照子はまだ46歳の若さだった。父の没後も、母は決して泣き言を言わず、愚痴をこぼすこともなく、「私たちの母」になり

きること努めた（「初めて母と呼んだ日」）

21歳で嫁ぎ、3人の子のまき

それまで病室に泊まり込んでいた母が、戻った家に帰る、美容院で髪を整え禮物に習書を買って来た。母が着ていたのは、父が一番好きな着物だった。

「あなた、似合いますか」母はそう言って父に微笑した。娘の眼から見ても、そのときの母は眩しいほど美しく

に、出版社・幻戯書房を設立する。07年には一政短歌会を創設して主宰となり、短歌文芸誌『弦』（GEN）を創刊した。

源義は1945（昭和20）年に角川書店を設立し、58年には主宰として俳誌『河』を創刊している。辺見は多忙だった父の背中ばかりを見て育ったと書い

ているが、その背中を追いかけると、出版社設立、短詩型文学の結社創設と、同じ道を歩んだ。

幻戯書房という社名は、源義が自宅を幻戯山房と呼んだことに由来する。『弦』という誌名は、幼年期から見えた父のふるさと富山の雪吊りをイメージしたというが、GENという音は、やはり源義を連想させる。

◎ ◎
辺見は2011年9月21日、東京都武蔵野市の自宅で脳内出血のため急逝した。72歳だった。歌人としての辺見は、父への挽歌を生涯詠み続けた。臨終の瞬間をつたへ、喉ぼとけごとりと落ちて逝きたまふ、唇サイレンの鳴りいづるかな（第1歌集『雪の座』収録）から始まる父愛の歌は、死の年の『短歌』8月号に掲載された次の一首で幕を閉じる。

「あなた、似合いますか」母はそう言って父に微笑した。娘の眼から見ても、そのときの母は眩しいほど美しく

に、出版社・幻戯書房を設立する。07年には一政短歌会を創設して主宰となり、短歌文芸誌『弦』（GEN）を創刊した。

（ノンフィクション作家）
二〇二〇年おわり